

## 欧米の子ども期研究 (Childhood Studies) の動向と課題 (2)

—M.ハマーズリーの方法論から子ども期研究の方向性を探る—

首藤美香子\*

### 【要旨】

本研究では、欧米の子ども期研究 (Childhood Studies) の動向と課題を探るため、英国オープン大学教育・社会調査学部名誉教授M.ハマーズリーの方法論の一部を翻訳紹介した。ハマーズリーは、子ども期に関して有意義な議論を行う上で不可欠なのは、様々な領域で展開されている研究成果を俯瞰し、各結論を裏付ける根拠が妥当か否か、提示されている各種データが十分に信頼に値するか否か、見極めることだとする。そのため、各方法が立脚する理論的枠組みの系譜と特徴を概説することはせず、学術研究における「知の生産過程」の精査を求める。なぜなら、データとは、研究主体による意思決定を伴う「知の生産過程」の産物である以上、研究の各段階で何を根拠に意思決定がなされたかがデータの妥当性や信頼性を左右するからである。次に課題設定や結果分析において、研究者自身の評価の観点を自覚し、結果や考察に研究者の志向性や価値観が強く反映されていないか点検を促す。このことは、研究の目的が「記述」か「評価」か、「知の提供」か「問題解決のための処方箋の提案」かによって、研究者自身の立ち位置が変わり、それが方法の選択に影響するからである。また、子どもに関する事案の位置づけや意味は特定の時空や人間関係、文脈のなかで編成され変化しながら、あるものは社会問題として認知され、科学的解明と政治的介入を要すると判断される。こうした社会問題の構築化に今日の研究者コミュニティは無関係ではいられないことを認識し、一層慎重に方法の決定と成果利用の在り方を検討すべきという。子ども期研究では、当事者として子どもを直接実験・調査に参加させる方法が様々に模索されているが、子どもの他者性や異質性をどう捉え扱うか、子どもの「声」とは何か、「声」をどう拾い解釈するか、難しい課題に直面している。実体としての子どもだけではなく、概念としての子ども=子ど

---

\* 子ども学部子ども学科

SUTO Mikako : Current Issues of Childhood Studies in the U.S. and Europe (2): Future Directions in Childhood Studies examined by M. Hamersley's Methodological Philosophy

も期をも対象とする子ども期研究の学術的意義とは、我々の子どもに対する概念装置の俯瞰と相対化にある。研究方法の検証が極めて重要な意味をもつのはそのためといえよう。

**キーワード：**子ども期研究 (Childhood Studies), M.ハマーズリー, 方法論

## 1. はじめに

欧米では、子ども期を「社会的構築物」と捉え、子どもの生きる個別具体的な文脈から、子ども期の多様で多義的かつ可変的な諸相の解明がなされてきている。この日本ではあまりなじみのない子ども期研究 (Childhood Studies) と称される学際分野では、子ども期の理解にあたり、どのような方法がふさわしいとされてきているのか。本稿では、子ども期研究の方法をめぐる議論に注目し、研究法としてどのような選択肢があるか、それぞれの方法の強みと弱み、さらには子ども期を研究対象とするゆえに生じる固有の課題について論点整理を行う。主な資料は、子ども期研究の事典類と英国のオープン大学の子ども期研究学科の教科書である。方法論の検討を通して、子ども期研究の動向と課題を明確にすることは、子ども期を対象とする学問と実践の新たな可能性を拓くうえで有意義な試みといえる。以下、欧米の子ども期研究の挑戦と蓄積をみてみよう。

### (1) 子ども期研究とは

子ども期研究とはどのような分野だろうか。現代の子ども期研究を牽引する代表的な研究者が執筆しているふたつの事典から確認する。40年ほどの歴史しかない新興分野ゆえ、学問としての輪郭がまだ把握しづらいのだが、実体としての子どもだけではなく子ども期の概念を対象とすること、「社会構築主義」の立場から発達心理学による子ども観の超克が目指されていること、人文・社会科学による子ども期理解の理論と方法の再構築が試みられていること、子ども参加型研究が模索されていること、が大きな特徴といえる。

はじめに『教育哲学思想事典』(2016年)の教育哲学者テサル (Marek Tesar オークランド大学教育・ソーシャルワーク学部教授/グローバル子ども期研究センター長) による定義を要約する<sup>1</sup>。

子ども期研究とは、子どもや子ども期に関する数多くのアプローチ、学問分野、理論、思想を盛り込んだ象徴的な概念 (an emblematic concept) であり、視角 (lens) である。この分野は研究と活動の両方を含み、子どもと子ども期に関する哲学的な基盤と思考に基づく。子ども期の概念は、子ども期とは未熟であるという生物学的理解から、社会的

に構築されるものという認識に変化しており、様々な哲学的解釈のうちのどれかが特定の社会のある時期と結びつくことで形成される。その意味で、子ども期に関する歴史的・政治的・経済的・地理的検証は、グローバリゼーションやイデオロギーの影響を解明することと並び、子ども期研究を推進する上で重要となる。過去30年、多くの学問分野が、自分たちこそが子ども期研究を定義し確立する権利をもつと主張し、自分たちの方法と視角が研究を先導していることを証明しようとしてきた。その意味で、子ども期を研究の中心に据える学問は、子ども期研究であると言明しうる。子ども期研究の意義とは、どんな分野に対しても開かれ、学際的事であること、そして哲学を有する点にある。子ども期研究は、本質主義や統合主義に陥ることなく、多くの研究者を、発達論のトップダウン式の理論的枠組みから解放し、子どもを社会的アクターとして捉え、子どもの権利、参加、脆弱性の再考を迫る。それは、子ども期をめぐる過去の構造的な考え方を解体させ、子ども自身の力や行為主体性が子ども期の概念形成にどう作用するかという観点からの子ども期概念の再構築をも促す。また、哲学的考察が加わることで、複眼思考と革新を生む開放性を呼び込む。その結果、社会学、哲学、人類学、批判的心理学、文学、建築学、教育学、法学、地理学などの学問分野や研究領域が、子ども期研究に対する見解、権利、関心を表明し、学際性を豊かにしてきた。また、子ども期研究のもうひとつの特徴とは、当事者である子どもを研究に参加させ、子ども中心の視座に立ち、子どもとともに、子どもの問題解決に向け、多様で創造的な探究を試みようとする点である。

次に、『子ども期研究事典』(2020年)の事典監修者のクック (Daniel Thomas Cook ラトガース大学子ども期研究学科特任教授) の定義の主要部を全文紹介する<sup>2</sup>。

子どもと子ども期は、1989年の「国連子どもの権利条約」採択を契機に、心理学や教育の領域を超え、様々な環境にいる子どもの社会的、法的、文化的、政治的な生の実態と文脈を探ることに研究や調査の焦点が当てられるようになり、歴史家、人類学者、社会学者、フェミニストを中心に「新しい子ども期研究」として知られる分野が誕生した。彼らは、子どもの行動は単純なものから複雑なものへ、理性のない状態から理性をもつ状態へと進化発展する、いわば発達段階と社会的成長の軌跡を直線的に捉える子ども期の概念に対して異議を唱えた。そこで、子ども期研究では、子どもとは、自らの生活を様々な方法を用いて創造し解釈することに関わる能動的な主体であるという立場に立つことを宣言する。また、子ども期とは、本来生物的に決められた普遍性をもつものではなく、社会的、歴史的、状況的に構成されたものであるという見方を促そうとする。こうした子ども、すなわち子ども概念は、文化的にも、存在論的にも、政治的にも、ずっとそこに留まるものでは決してなく、新しい洞察や新しいアプローチがもたらされるたびに、問われ、問い直されるものである。子ども期研究は、何よりも、事実に関する知識を与えるだけでなく、子ども期に対する既存の認識や思考の枠組みを刷新することにより、従来とは異なる子ども理解の視角 (lens) を持つことこそが、まだ形成途上のこ

の分野に特別かつ決定的な貢献を果たしている。テーマや分野に対するこのような姿勢は、研究者や実務家、団体や政府に対し、計画や実践では子どもの立場を説明し、考慮するだけでなく、その計画や実践が必然性をもち構成的であることを求める。その過程で、子ども期研究に携わる人々は、理論と方法の面で大きく介入を続けることになるが、それでも子どもと子ども期を中心に考えることに変わらない。

上記のふたつの事典は、子ども期研究の前身である子ども社会学の問題意識を継承している。子ども社会学の創始者のひとりプロウトは、大人と子どもの差異や関係性は生物学的に先決予定された人類共通の現象とみなす本質主義や、子どもの成長や変化は普遍的で予測可能であり、予め秩序や規則によって統治された計画性に基づき、より高度で複雑に洗練されたレベルに到達するものとみなす発達主義に疑義を呈した。そして、大人は「公的・文化的・理性的・自立的・能動的・有能な存在で労働するもの」、子どもは「私的・自然的・非理性的・依存的・受動的・無能な存在で遊ぶもの」という二項対立モデルで固定する近代的思考は、もはや時代遅れで有効性を失っていると批判し、子どもから大人へ向けて働く作用、すなわち子どもの当事者性、行為主体性に注目し、大人と子どもの関係性を双方向から動的に捉える必要があると説いた。このプロウトの唱える構築主義は反本質主義の表れであり、発達心理学批判が基底にある<sup>3</sup>。

テサールとクックの定義およびプロウトの主張にみる通り、子ども期研究の革新性とは、子ども期を「社会的構築物」とみることで、「実在としての子ども (Child)」を対象とする科学的アプローチ・実践的アプローチに対し、「概念としての子ども (Childhood = 子ども期)」を探究する社会構築主義的アプローチの参入を広く歓迎した学際性にある。このように、子どもではなく子ども期と表記するのは、個々の子どもの特殊性を排し、子ども期という〈人生段階や人間の成長過程のある期間〉、〈大人との区分や境界〉、〈子どもという存在に対する観念や表象、価値観〉に焦点をあてるからである。よって、子ども期研究において最も重要なのは、子ども理解のための視角 (lens) を転換することにある。この視角 (lens) を、「メガネ」すなわち概念装置と言い換えると、子ども期研究の目指すところのものがより鮮明となる。

例えば、私たちは「生きて動く子ども」を「ありのまま」に、その「真実」の「自然」な姿を客観的にとらえようとどんなに努力しても、「子どもとはこういうもの」「子どもはこうあってほしいもの」という「刷り込み」や「思い込み」、要は「メガネ」越しでしか捉えられない。そして厄介なことに、この「メガネ」はいったんかけてしまったら、取り外すことは容易ではない。だとするなら、私たちは一体どんな「メガネ」をかけているのか、いま最もよく見える「メガネ」として重宝されている発達心理学の「メガネ」を外すことから出発しよう、というのが子ども期研究といえる。さらに、時代や社会、文化のなかで作りあげられ積み重なり当たり前になってしまった=構築されてきた「大きな枠組み」、つまり「子どもらしさ」、「子どものため」、「子ども中心」、「子どものニー

ズ」、「主体／主体性」など、子どもに対して日常的に用いられる定型句を再検証することは、「曇りのない目」で子どもを見ているつもりでも、無意識にかけている「メガネ」の歪みや偏り、汚れ、ひび割れを知るうえで極めて有効となりうる。このように既存の「メガネ」からの解放と様々な「メガネ」への試し替えが、子ども期研究の出発点といえよう。

## (2) M.ハマーズリーの方法論に着眼する意義

なぜ心理学が子ども理解の指標となり、子どもの「健全」で「正常」な「発達」を判断する決定をもつようになったのか、発達心理学の前提にある子ども観や発達観、子育て・教育・保健医療・福祉・家族政策さらには消費文化など様々な実践のなかで発達心理学が果たした役割や貢献についての批判的洞察は、多く蓄積されている。例えば発達心理学が内包する権力性、政治性の分析ではバーマン、ローズの研究が邦訳により知られているが<sup>4</sup>、ウッドヘッドによる発達概念の再考は、子ども期研究の基盤確立に重要な役割を果たしてきた。とはいえ、先の事典でのクックの言葉を借りるなら、子どもを対象とするあらゆる領域で、発達心理学の支配が揺らぐことはないのが実情である<sup>5</sup>。

だからこそ、子ども期研究にふさわしい方法とは何か、大人期を対象とする研究とは異なる方法を要するのか、方法について活発な議論が続けられている<sup>6</sup>。そうした試行錯誤の取り組みのなかでも、注目したいのが、英国の子ども期研究の重要拠点であるオープン大学の教科書全四巻一『子ども期を理解するー領域横断的アプローチ (Understanding Childhood: A Cross-Disciplinary Approach)』・『文化的世界のなかの子どもと若者 (Children and Young People's Cultural Worlds)』・『文脈から読む子ども期 (Childhoods in Context)』・『ローカルな子ども期、グローバルな論題 (Local childhoods, global issues)』(いずれも Polity Press 2013年) 一で論じられている方法論である。各巻の第六章では順に、「子ども期に関する〈知〉はどのように生み出されるのか? 方法論に関する論題」、「オフライン／オンラインの子ども期の日常調査」、「映像データを使う子ども期の調査」、「社会問題としての子ども期の事案に関する調査」がテーマに掲げられているのだが、実は、四巻とも、発刊同時に同大学子ども期研究科で実際に教鞭を執っていたマーティン・ハマーズリー (Martyn Hammersley 1949-) が執筆している。

教科書の著者紹介欄によれば、ハマーズリーはオープン大学の教育・社会調査学部の教授で、教育社会学研究から出発し、のちに社会的・教育的調査をめぐる方法論的問題の解明に取り組んできた、とある。教科書出版当時は、社会調査における倫理的問題や、ニュースメディアが社会科学の研究成果をどのように表現するかなどに強い関心を示していたようだ<sup>7</sup>。なお、ハマーズリーの業績を紹介する複数のサイトをみると、代表的な著書には、『エスノグラフィー：実践の原則 (Ethnography: Principles in Practice)』(Routledge 1983年→第4版2019年)、『社会調査のポリテイクス (The Politics of Social

Research)』(SAGE 1995年)、『エスノグラフィー研究読本(*Reading Ethnographic Research*)』(Longman 1998年→第2版 1997年)、『質的探究を問う (*Questioning Qualitative Inquiry*)』(SAGE 2008年)、『社会科学の限界 (*The Limits of Social Science*)』(SAGE 2014年)、『エスノメソドロジーの革新性 (*The Radicalism of Ethnomethodology*)』(Manchester University Press 2018年)、『文化の概念 (*The Concept of Culture*)』(Palgrave Macmillan 2019年)、『社会学概念の悩ましさ (*Troubling Sociological Concepts*)』(Palgrave Macmillan 2020年)など、方法論の研究書が多数みられる<sup>8</sup>。

長年にわたり社会科学の方法研究に取り組んできたハマーズリーの知見を、ひとつひとつ確認していただけても、学術的意義が高い試みである。とりわけ、今後の子ども期研究の展開において有益なのは、ハマーズリーが、教科書の各巻・各章で設けられた課題に取り組む際に読むべきとして与えられている論文や資料、調査結果のいくつかを選び、それらの「レビューの仕方」を具体的に指南している点である。つまり、ハマーズリーは、教科書の事例をもとに、子ども期研究がいかなる方法でなされ、どのような成果が挙げられ、それがどう提示されているかを丁寧に振り返り、研究の受け手がそれらをどう読み解き、活用するとよいか、踏み込んだ検証と考察を行うことで、最終的には、どのような研究が子ども期を対象とする場合に望ましいか、研究の担い手が守るべき原則・原理まで提案する。そして、研究とは何のためにするのか、研究の本質や研究者の役割責任まで哲学的に突き詰めようとしている。だが、ハマーズリーの方法論哲学を正確かつ体系的に捉えることは、残念ながら筆者の力の及ぶものではなく、まずはその骨子を把握するところから始めるしかない。

なお本研究では、総論に当たる「子ども期に関する〈知〉はどのように生み出されるのか? 方法論に関する論題」と「社会問題としての子どもの期に関する調査」に絞り、ネット利用の仕方や映像データの扱いに特化した「オフライン／オンラインの子どもの日常調査」と「映像データを使う子ども期の調査」の紹介は別の機会に譲る。その理由は、前二者が学術研究として子ども期研究の方法論的確立を図る試みであり、共通のテーマを扱っているのに対し、後二者は近年の社会情勢の変化にあわせた視点や技術の刷新を説いており、論点が異なるためである。なお、教科書という性質上、全巻・全章とも事例紹介—設問—解答—検討と評価—解説と考察—発展的課題の提示と展望、という構成で一貫しており、ハマーズリーの担当章もその例外ではない。正解はなく、読者(受講者)に問いを投げかけ、考えさせるための仕掛けが随所になされており、読解と思考の訓練が強く意図される内容となっている。

概要の翻訳にあたっては、基本的にはハマーズリーの論理構成に従うが、主旨をわかりやすく伝えるため前後を入れ替え、また紙幅の都合で事例など一部を割愛する。核心部分は全文翻訳し、要約にあたっては、正確な解釈を心がけるとともに、ハマーズリーの論の鋭さ、ユニークさ、洞察の深さを損なわないよう注意した。また筆者の判断で、

子ども期研究の鍵概念や背景、経緯など、必要に応じ最小限の補足説明を加えている。

## 2. 子ども期研究の方法:子ども期に関する「知」はどのように生み出されるのか?

### (1) 「知の生産過程」からデータの妥当性を精査する意義

『子ども期を理解する一領域横断的アプローチ』第六章で、ハマーズリーは方法論を論じるにあたり、「子ども期に関する「知」はどのように生み出されるのか? 方法論に関する論題 (How is the Knowledge about childhood produced? The issue of methodology)」をまず問う<sup>9</sup>。その理由は、子ども期に関して有意義な議論を行う上で不可欠なのは、様々な領域で展開されている研究成果を俯瞰し、各結論を裏付ける根拠が妥当か否か、提示されている各種データが十分に信頼に値するか否か、見極めることだと考えるからである。そこでハマーズリーは、各方法が立脚する理論的枠組みの系譜と特徴を概説することは敢えてせず、学術研究、特に子ども期を対象とする研究における「知」の生産過程に焦点を当てる。ハマーズリーは、「知」を量的データと質的データに分け、どちらの「知」に依拠するかにより方法は異なるという観点から、量的データと質的データの違いとは何か、それぞれのデータはどのような過程を経て作り出されるか、そうしたデータを基に導かれた結論の妥当性を脅かす要素として何が想定されるか、を明確にする。本章は、社会科学における量的研究、質的研究それぞれの課題設定の仕方、データ収集法、データ分析・解釈・評価法を対比させ、双方の強みと弱みを精査している。よって、初学者向けに「知の取り扱い方」を指南する格好の入門書となっている。

### (2) 量的データの強みと弱み

ハマーズリーの整理に従い、量的データを作成し、理解し、評価する観点を示してみよう。

量的データは数値の形をとり、様々な種類の事象の頻度や対象物(人を含む)がある種の属性を持つ程度を示す。量的データは、通常、調査や実験を行う研究者により作成されるが、政府や国際機関など組織が公表する統計にも多く含まれ、それらは比較的入手が容易である。このほか、アーカイブには大量の量的データが保管されており、過去の調査結果を二次分析の対象にできる。

実験、観察、質問紙調査等で得られた量的データ=数値には客観性が担保され、その決定的な性質は説得力をもつ、と思われがちである。だが、ハマーズリーが強調するのは、データとはそもそも、ある事象とその特徴をどのように同定し測定するかをめぐり、研究主体による意思決定を伴う「知の生産過程」の産物であり、その意思決定には常に妥当性を脅かす危険性がはらんでいる点である。また、研究者が独自にデータ作成を行う場合と異なり、組織が作成するデータは特定の目的や関心に基づいており、それはデータの信頼性や使用目的に少なからぬ影響を与えうる。

ここでハマズリーは、ユニセフの幸福度調査（UNICEF report *children's well-being* 2007）を例にとり、組織データに潜在する意思決定を伴う「知の生産過程」を段階的に可視化し、数値の妥当性を精査することで、調査の在り方自体を問う。その試みの一部を以下で示す。

量的データ＝数値には、「《もの》を数えた結果」と「《統計処理》の結果」の二種あるが、前者の検証には、何を数え、何を測っているのかを特定し、特徴づける作業が必須である。ユニセフの大規模な国際調査では、子どもの「幸福度」に関する様々なデータをユニセフが設けた「一つの尺度」で測定し、比較対照に基づく順位付けがなされている。そこでは公式統計や対象国でのアンケート調査など、さまざまなデータソースが組み合わされているのだが、留意すべきは、ユニセフが設けた「数えるべき／測るべき《もの》」に関して、各国間で完全に認識や理解が一致しているとはいえない点である。例えば、鍵概念「幸福＝well being」を構成する三要素「物質的幸福度」「教育的幸福度」「主観的幸福度」を測定する指標や評価基準は、それぞれの国の実態に応じ解釈に幅やズレが生じるのは想定しうる。実際、貧困度を測る指標「世帯収入」では、何ををもって「世帯」・「世帯の構成員」・「就業者」とみなすか、その範疇や属性は各国の判断に委ねられる。同じく教育レベルを知る「識字率」も単純な概念ではなく、専門家間で意見が分かれ、読み書き能力や文章理解度を測るテストの形式と実施方法、被験者によって結果は異なる。つまり、主要概念の定義や特定方法が国内外で一致していなければ、国際比較の結果の妥当性は揺らぐ。順位が国の優劣を決めるほどの影響力をもつ国際調査が示す量的データの弱みがこうして浮き彫りにされるのである。

量的データの強みは、数学的に得られたリソースのいくつかを用いて記述し（describe）、そこから推論を導く（draw inferences from them）ことができる点にある。多くの場合、調査には、より大きな母集団への一般化を視野に入れた事例のサンプルの調査が含まれ、数学的統計は、サンプルが代表的である可能性を最大化し、代表的でない可能性を計測するための指針を提供する。しかし、サンプリングの要件を満たすことは容易ではなく、また各国でサンプリングが適切になされていたかを後から確認するのは事実上難しい。本稿では詳細は省くが、平均値や標準偏差といった「《統計処理》の結果」はサンプル次第であることを、ハマズリーは例示している。

量的研究は「記述的（descriptive）」であるだけでなく、「説明的（explanatory）」でもありうるため、何が起こったのか、理由つまり因果関係を説明することもできる。しかし、実験デザインもしくは多数のケースの比較分析を通じ関係変数を厳しく統制しない限り、因果関係は明かにならず、かといって正確なデータを取るため完璧に整備された状況は、生活世界から遊離した非現実的なものになってしまう。20世紀後半に多くの社会科学の分野で質的手法が用いられるようになった理由は、こうした量的研究の限界にも由来している。



### (3) 質的データの強みと弱み

そこで、量的研究の弱みを補うべく、質的研究に期待が高まるようになる。次に、質的データを作成し、理解し、評価する観点をハマズリーの論に沿ってまとめてみよう。

質的データは、数字ではなく言葉で構成される。質的データは大きく、主に研究過程とは無関係に作成された文書データ (documents) と研究者自身のフィールドノート (field notes) に二分できる。研究者により発掘・発見あるいは採集された文書データのなかでも、紙媒体の種類は豊富で非常に多岐にわたるが、なかでもテキストとは様々な言語や形式で書かれたある種の文章を指す。そのほか、文書データには絵画や映像、写真、図面、地図など視覚資料も含まれる<sup>10</sup>。一方、フィールドノートとは、研究者が参加観察あるいはインタビューでのインフォーマントの発言を記すものである。ここでハマズリーは、フィールドワークで採取される質的データの性格を明らかにし、妥当性を揺るがすポイントを提示する。初学者には貴重と思われる指摘であるため、本文から詳しく紹介したい。

今日、質的研究では、自然発生的な出来事、特にインタビューの電子記録を作成する際に音声録音やビデオ撮影を行うことが多い。音声録音は、フィールドノートよりも詳細で正確な会話を残すことができるが、フィールドノートにそれらすべてが記録として採用されるわけではない。ビデオ撮影は、言葉だけでなく、物理的な状況や動きに関する情報も得られるが、かといって、そこで起きたすべての事象を余すところなく把握できていると考えるのは間違いである。しかもビデオ撮影は、通常の観察を妨げ、何らかの形で人々の行動に影響を及ぼす恐れもある。

当然のことながら、フィールドノートも電子記録も、分析し、調査の結論を導き出すための基礎資料として使うには何らかの処理が必要とされる。フィールドノートは通常、時間の制約があるため、現場でメモ書きされ、後で完全な形で書き上げられることが多い。同じく、音声や映像も記録として残すためには、改めて言葉に置き換える必要がある。ここで注意しなければならないのは、音声録音の再現では、背景にノイズが多い場合、また研究者の母国語でない言語の場合などは、書き起こすこと自体に様々な困難を伴うということである。さらに、テープ起こしは非常に時間がかかるため、作業負担を軽くしようと、研究活用する範囲を限定しがちになる。こうした処理過程に伴い生じてしまう制約や制限は、基礎資料となる最終データが、当初もうけたりサーチ・クエスチョンに十分に答えるものにならない可能性もでてくる。

ところで、質的研究から得られた「知」の妥当性を評価する場合、何より、言葉に対する鋭敏なセンスが求められる。このことをハマズリーは、数の多少や頻度、強度を指すとき、つまり量的な判断を数値ではなく、「わずか」、「いくつか」、「多く」、「しばしば」、「めったに」や「強く」、「弱く」といった正確さを装わない言葉による説明のほうが、不正確な数値データよりも優れていることもある、と述べる。それほど、質的デー

タと量的データの区別は、一般に想定されるほど単純ではない、というのである。

とはいえ、研究者が用いる言葉が何を含意しているのか、質的データが作成された前提や背景を考慮する必要があるのはいうまでもない。さらに、質的データがインタビューに基づく場合、インフォーマントの言葉が完全に正確であるとは限らず、時に深刻な誤解を招きかねないことにも留意すべきである。ここでハマーズリーは、フリーマンによるミードの『サモアの思春期』批判を例に、インフォーマントが研究者に真実を語らない理由を複数示す<sup>11</sup>。例えば、研究者が何を期待し、何を承認するか、どのような前提に立っているかが情報提供の方向性を左右する／インフォーマントの理想や願望が反映される／そもそも日常的な行動は意識化される機会がないゆえ説明や動機の解釈に正確さが欠けがちになる／ちょっとした悪戯心から故意に虚偽の情報が提供される／羞恥心から冗談で誤魔化される／などである。ただし、サモアでのフィールドワークの経験が豊かなフリーマンによる反論は、ミードによる元の調査とフリーマンの再調査の間に時間差があり、調査対象者も異なることから、競合するテーマの相反する結果に対し、両者の間に優劣や正否を判定するのは難しい、とハマーズリーは述べる。

質的研究では一般に、インフォーマントからの説明を自身の観察と照合させたり、同じ状況下で複数のインフォーマントに話を聞くなどにより、データの正確性を自己点検でき、調査対象の全体像を把握しうる。このように、異なる情報源から得られたデータを組み合わせて比較的できるのが、質的調査の強みである。一方、ひとつまたは少数のケースから得た質的データから普遍化や一般化を試みたり、ごく限られたデータのみで因果関係を立証することはできない。このように、量的研究、質的研究双方ともそれぞれ強みと弱みがあり、何かを得たら何かを失うトレードオフの関係に陥る。ここで研究者は、量的データと質的データのどちらを使うかの選択に迫られるのだろうか。

#### (4) 量的データと質的データのどちらを使うかの選択

ハマーズリーは、研究者は、自分たちが取り組んでいる問題に答えるために、どのような種類のデータが必要なのか、を判断しなければならないと強調する。同様に、研究報告書を読み、評価する際には、そのテーマを調査するために最適な種類のデータが使用されたかどうか、また得られた結論を裏付けるに足るデータであったかどうかを検討すべきとする。もちろん、研究課題によっては、どのような種類のデータが必要か、どちらが望ましいかが、ある程度事前に決まる場合もある。

従来の方法をめぐる議論は、量的研究と質的研究のどちらが優れているかという点に偏りがちだったのに対し、ハマーズリーは、それぞれの強みと弱みを示すことで、同じリサーチ・クエスチョンに対して量的質的双方で対応可能となりうること、さらに量的データと質的データを組み合わせることで、それぞれの方法の弱点を補完し合える「混合法」運動 (mixed methods' movement) についても言及している。

質的研究者のなかには、子どもや若者の意見や活動に焦点を当てる場合、量的手法は不適切だとする主張する立場もある。彼らによれば、質的研究の強みは、直接人と接触し、その人の考え方や実践を知ろうと比較的自由度の高いアプローチを採るため、社会現象に関してより確かな知識を得られる点にある、という。加えて質的研究は、人々の態度や行動は創造的でダイナミックでかつ文脈によって変化するという性質に応じられるよう柔軟な設計にできるのだそうだ。では仮に、このような性格を質的研究がもつとして、果たして、質的研究は量的研究より有利で有効な方法といえるのか。

ここでハマーズリーは視点を転じ、「子どもを研究対象とすることの難しさ」へといったん議論をもどす。そして子どもを研究することを難しくする二つの理由に目を向ける。一つ目は、子どもはまだ十分に社会化されておらず、発達途上で、特殊な生存条件に置かれているため、大人にとって「異質な存在」あるいは「他者」であるという理由である。そのことは、赤ちゃんの欲求や行為を解するのは決して容易ではないことから想像できよう。よって、子どもを理解するためには大人の通念や常識を脇に置き、異なるものの見方や考え方を学ぶ必要がある。だが、大人になってしまうとそれはもう無理かもしれないし、できたとしても部分的にしかできないかもしれない。確かにジョーンズは、「いったん子ども期が大人の知に取って代わられると、大人のフィルターを外して以前の状態に戻ることはできない。子どもであったこと／子どもであったことに関する大人の解釈や記憶は、必然的に大人であることを通して処理される。」と述べている<sup>12</sup>。

子どもを研究することを難しくするもう一つの理由には、大人はみなかつて子どもであったということから「子どもとはこういうもの」という予断や憶測が紛れ込みやすく、さらに子ども期研究者の大半は、子どもと何らかの関わりを持っているため、一人ひとりの子どものそれぞれの経験や生活がいかにユニークであるかを、敢えて自覚しづらくなっていることがある。研究者は、自分の実感や主観に依拠したり、子どもを一括りに「みな同じ」とみなし、性別、階級、民族性、地域性や世代間の相違などから生じる子ども間の差異を見落としがちになる。だが、子どもというカテゴリーは、単一の均質な存在ではなく、緩やかに定義された異質な集合を拾い上げているにすぎず、子ども間にみられる相違点や共通点は、大人の経験が多様であるのと同じと考えられるだろう。

ハマーズリーによれば、こうした二つの考えが「子どもを理解することを難しくする」理由としてそれぞれ説得的であるとみるものの、両者の前提には、子どもの行動を説明するために必要なのは、大人が子どもに戻ることに、そして子どもの経験を直接把握することで、子どもの視点から世界を見ることができるようになる、という認識が共通していると問題視する。なぜなら、子ども自身が、子どもであることがどのようなことなのかを直接知っている、という暗黙の了解が読み取れるからである。だが、子どもは子どもである自分のことがわかっているため、子どもに問い、そこから得た回答を記述すれば理解につながり、子ども期研究は事足りるのだろうか。

ハマーズリーはこう述べる。少なくとも社会科学上の理解では、「知」とは単に経験が反映され具現化されたものではなく、特定の研究課題に答えるために、理論的な資源を記述し、そこから解釈や判断を行うデータ処理によって生み出されるものである。よって、子どもを理解することの難しさとは、ジェンダー研究や異文化理解で議論されてきていること、つまり男性が女性の視点に立てるのか、女性のことは女性に聞けばわかるのか、異文化のなかでの生活を直接体験することが異文化理解につながるのか、といった社会調査の方法をめぐるジレンマに通じるのではないか、というのである。

そして、ここからハマーズリーは、研究の目的とは何か、研究者の役割とは何か、という根源的な問いを浮かび上がらせようとする。つまり、子ども期研究が基本的に目指すのは、物事のあり方やその理由を文書化して「知」を生み出すことなのか、それとも物事のあり方を批判的に検証し、変革に貢献することなのか、そのどちらであろうか。

#### (5) 「記述」志向か「評価」志向か

研究者が評価的判断にとらわれないよう「記述」を通じた「知の生産」を重視する立場は、すでに文化相対主義を掲げる人類学や、研究対象である人々、特に周縁化された集団に属する人々の声に耳を傾け彼らの視点や実践を彼ら自身の言葉で理解しようとする社会学、カルチュラル・スタディーズ、現代の視点や価値観から過去を読み解くことを自制する歴史学に採用されている。

しかし近年、子ども期研究では、より批判的で、評価的で、介入主義的なアプローチが影響力を持つようになってきている。確かに、子どもをどのように育てるか、親や他人の子どもへの接し方にどのように対応するかなど、実際的な判断や決定を下すには、「記述」だけでは不十分であろう。

「記述志向」か「評価志向」かのジレンマを克服する方法として、ハマーズリーは、文化相対主義を前提としない記録志向の人類学の取り組みを参照する。つまり、調査を実施する際に、一連の価値観に基づき調査の枠組みを作ることをよしとしても、その後は、この価値観に関連して選択された世界の特徴を記述することに完全に集中し、それらを評価し批判したりせず、説明することにかかりきりになるという方法である。このように、評価を控えることで、研究に対する自分自身の前提や枠組み自体を点検し直す機会も得られる。評価は正当なものではあり得るが、それは研究の最終的な帰着点とならないよう留意すべき、というのがハマーズリーの結論である。

以上、ハマーズリーは、子ども期研究にふさわしいのは量的研究か質的研究かの二者択一ではなく、重要なのは研究目的に応じて研究方法が適切に選択されているかどうかであり、両者の強み・弱みを見極めたうえで、補完しあう混合法も推奨する。また、方法の適否は、「知の生産過程」に注目し、各段階で主体の意思決定がどのようになされたかを追跡する作業により、データの妥当性、信頼性から判断できるとし、数値や言葉

で装われた客観性、実証性、論理性の綻びや緩さをいかに見抜くか、そのポイントを示す。さらに、大人による子ども期理解のむずかしさは、ジェンダー研究や人類学にも共通するもので、当事者に聞けばよい、当事者は自分のことがわかるというわけではなく、当事者の視点に立つことの難しさを問いかける。最後に、子ども期研究の目的は事象の「記述」か「評価」か、研究計画の設計や解釈において研究者は自らの問題意識や価値観とどう距離を取るのか、今日の研究者を引き裂く葛藤への対処の検討については、第四巻に引き継がれる。

### 3. 子ども期研究の方法:社会問題としての子ども期の事案に関する調査

#### (1) 「社会問題の構築化」に関与する「知」を精査する意義

第四巻『ローカルな子ども期、グローバルな論題』第六章では、ハマーズリーは、子どもの貧困・不健康・暴力など子ども期に関する事案 (childhood issues) が、政策的介入を要する社会問題 (social problems) として認識されるようになった今日における子ども期研究のあり方を問う<sup>13</sup>。その理由は、子ども期研究とは、客観的事実の提示による「知の生産」に留めるべきか、それとも研究成果を子どもの生活改善につなげ「変革に貢献」すべきか、研究者が葛藤を抱えざるを得ない状況に陥っている、とみるからである。

1990年代以降、多くの国で、公共政策と実践は「エビデンス」を基礎とするものとなり、介入の意義や効果は研究データによって立証されるべきものとなった。それは、学校教育やソーシャルワークの在り方を変えていっただけでなく、研究者に「何が効果的か」を明確にすることが強く期待されるようになったことを意味する。だが、ハマーズリーは、研究とは本来多様なものではないかと現況に疑問を呈す。なぜなら、研究の目的やテーマ、方法、見込まれる結果は、研究者の専門性・所属・資金源・裁量権・発表の場に応じて異なり、また研究成果の受容のされ方やそれが及ぼす影響は、研究を取り巻く社会情勢や利害関係、イデオロギーの対立などとも全く無縁ではないと考えるからである。ハマーズリー自身は、ここ数十年の一般的な傾向、すなわち、より幅広い役割が研究者に課される研究環境の変化は、結論が偏る危険性を高め、政治目的のために研究の権威が悪用されることにつながる、と懸念する立場に近い。

ハマーズリーは、研究・社会問題・政策立案・実践の関係はそう簡単でないという。ハマーズリーが問題視するのは、既存の思考様式である。我々は多くの場合、現在の社会問題の定義を所与のものとして受け入れ、誰が非難されるべきか、誰に責任があるのか、何をなすべきかを考え、直ちに行動に移そうとしがちである。だが、そうした行為は、社会的な関心事の何に人々の焦点が集まり、改善や解決を要する緊急課題へとどのような過程を経て編成されていくのか、その複雑な経路の各段階でなされた判断や決定の基底に隠された問題意識や価値観を見落とすことになりかねない。

歴史を振り返るなら、政治家・利益団体・慈善団体・政府機関・マスメディアなどが

重要な媒体となり、数ある事案からひとつを抽出し、解決のための行動を迫る社会問題として位置づけ、原因を特定し、ある人々に非難と責任を負わせ、改善策を提案する際、彼らは自己の立場や主張の正当性を証明するため、研究成果を巧みに利用してきたことがわかる。よって、研究者も社会問題の構築化の一端に加担してきたといわざるをえないのではないか、というのである。

こうした研究・社会問題・政策立案・実践の相当に入り組んだ関係を、ハマーズリーは、「クラックベビー」に関する二つの研究をもとに検証する。

## (2) 子どもの事案が社会問題に編成されるまで

「クラック」とは、1980年代初めより米国などで出回るようになった違法コカインのことである。白人男性の乱用率のほうが高かったにも関わらず、80年代後半に、貧困層のアフリカ系米国女性の一部が妊娠中に「クラック」を使用していることが非難的となる。というのも、クラックの使用は胎児に悪影響を及ぼし、早産、乳幼児死亡、身体的欠陥、知的発達遅滞、行動障害などを引き起こすという因果説が有力視され、「クラックベビー」の保護と救済を図る介入策が急がれたからである。

ここで、ハマーズリーは、上に述べた医学的解釈の修正を試みたオルティスとブリックスの研究に注目する<sup>14</sup>。結論を先取りすれば、オルティスとブリックスは、「クラックベビー」に対する危機意識が生じた社会的背景を精査し、「クラックベビー」問題の本質は、新保守主義経済下における人種差別にあり、違法ドラッグを使用した特定の人々の道義的責任を追及する一時的な社会反応に過ぎず、母体のクラック使用自体は有害ではない、という大胆な説を唱えたのである。

ハマーズリーは、オルティスとブリックスによる新解釈に注目し、一定の評価を与えつつも、持論の正当性を主張するために、彼らが恣意的に根拠を選び、過去の調査結果を単純化・歪曲化していたこと、さらにオルティスとブリックスの論稿が掲載された雑誌は、実証科学系ではなくポストモダン系であり、過去に学術誌としての編集の信頼性が問われていたことまで突き止める。このように、ハマーズリーは「クラックベビー」に関して相対立する見解を例に、立場が変われば援用される基礎的データの種類、分析方法、解釈だけでなく、成果発表の媒体となるメディアの性質や発信の仕方までもが異なることを具体的に示す。では、以下でもう少し詳しくみてみよう。

オルティスとブリックスは、赤ちゃんの異常の原因を妊娠中の「クラック」の使用に求める言説は、メディアや保守系の評論家、右派の政治家と医学研究者によって編成されたもので、母体のクラック使用は乳幼児死亡率の増加および先天的障害の発生の直接的原因ではないとみなした。ところが、ハマーズリーによって、オルティスとブリックスの結論は、自ら検証実験や追跡調査を行って得たものではなく、公式統計との突合せの作業に加え、数多くの関連研究から医学専門雑誌に掲載されたフランクらの「システ

マティックレビュー」を選び、それを唯一の根拠として導きだされていたことが明らかとなる。なお「システマティックレビュー」とは、特定の課題に関して入手可能なすべての先行研究を収集し、独自の基準を設けて厳しく選別し、結論の妥当性を徹底検証する試みを指す。

「システマティックレビュー」に投稿したフランクラボストン大学の医学・公衆衛生の研究者は、「クラックベビー」に関する過去の研究を総点検した結果、出生前のコカイン被暴は有害だとする研究では、赤ちゃんの生育・発達に悪影響をもたらす可能性の高い他の要因（飲酒、マリファナ使用など）が確実に制御されておらず、一方、これらの要因を制御した研究では、コカイン被暴は一般的に影響ない、という報告がされていることを発見した。そこからフランクラは、妊娠中のクラックの使用と赤ちゃんの生育・発達の異常に明確な因果関係は確認できなかった、と総括した<sup>15</sup>。

ここでハマーズリーが注視するのは、オルティスとブリックスがフランクラの医学的見解を単純化し歪曲していた点である。フランクラは、「クラックが妊娠や胎児に及ぼす影響は、あったとしてもごくわずか」で、「クラックは原因ではなく、相関関係であった」とし、また「出生前のコカイン被暴が、複数の他のリスク要因からなる後遺症と重篤度、範囲、種類において異なる何らかの発達阻害作用があるという説得力のある証拠はない」、と慎重に留保したのに対し、オルティスとブリックスは「クラック」は「有害な影響を及ぼさない」、との極論に傾いた。

### (3) モラル・パニックからみた科学と政治の関係

そこから、ハマーズリーは、オルティスとブリックスの関心は、「クラック」使用がもたらす子どもへの影響を科学的に解明することではなく、「クラックベビー」の存在が引き起こした社会現象すなわち「モラル・パニック」にあったと解する。この「モラル・パニック」という用語にはもともと、マスメディア、政治家、一般市民がある問題に対してみせる「反応」は「過剰」だとの批判が含意されている。つまり、オルティスとブリックスの主張は、「有害でもない」のに妊娠中に「クラック」を使用した黒人の貧困女性を標的に絞って攻撃することで、新保守主義下の経済政策の失敗が招いた深刻な貧困・格差から人々の目を逸らせ曖昧にした点が、「クラックベビー」騒動の「問題」だというものである。

だが上述した通り、ハマーズリーは、その主張を裏付ける証拠は十分ではないとみた。そもそも、オルティスとブリックスは、なぜクラックの使用が飲酒・喫煙・他のドラッグなどと異なり、胎児に影響はないと断言できるのか、クラックを使用した黒人コミュニティの貧困や生活荒廃の実際はどうだったのか、確たる新しい根拠に基づき言及していないからである。さらに、オルティスとブリックスの研究が発表されたのは、カルチュラル・スタディーズの専門誌「ソーシャル・テキスト」で、本誌は様々な社会的・文化

的現象を取り上げ最新の解釈方法を模索するポストモダンの実験的な議論の場を設けているが、論文採択の条件や査読体制に甘さが指摘された過去もあった。それでもハマーズリーがオルティスとブリックスの研究を取上げて取り上げるのは、フランクらによる慎重な因果関係分析、つまり実証的な科学研究でさえ、疑念の余地がないわけではないことを伝えたいがためである。

ハマーズリーはいう。科学的知見の妥当性を問う余地は常にある、と。その上、人々の関心事が社会的に構築されていく過程では、特定の政治的立場を推進させ擁護するために、科学的知見が丸ごと搾取されたり、どうみても不合理な短さに切断されることも間々ある。要するに、どんな研究であっても、その妥当性が完全無欠な結論を生むことはないという事実が意味するのは、見解が異なれば懐疑論を展開する余地が必ずあるということである。そして批評する側は、自分たちの先入観や偏見にそぐわない証拠には異議を唱え、自分たちが同意する主張に関しては、より緩い方法論的基準を採用する、といった意図的操作も時に辞さない。だからこそ、研究者はこうした傾向に巻き込まれ、結果的には研究の政治的利用に加担してしまうことを自覚すべきというのである。

このようにハマーズリーは、論議の対象となったある事案が、社会問題に特定され、解決や改善が目指される過程を注視する。そして、それら社会問題の性質や範囲に関し、その後になされた修正作業において、研究上の様々な知見がどのように関与したかを追跡する。続けて、研究成果が世論や政策立案に取り込まれていく段階で、単純化や歪曲化が生じる危険性を例示する。さらに、研究成果の公表が社会問題の構築化にどう作用するか、論証を行った最後に、研究方法が社会に与える影響を、研究者と研究対象者、特に子どもとの関係性から見直そうとする。

#### (4) 「声」とは何か、「声」をどう聴くか、子ども参加型研究に潜在する課題

本稿の冒頭にて、子ども期研究では、子どもの自律性や行為主体性を認め、子どもの視点に立ち、子どもの「声」を積極的に拾い、当事者として子どもを直接研究に参加させる取り組みが模索されていると紹介した。ハマーズリーは、こうした子ども参加型研究の取り組みは、「研究の目的や意義は何か」、「研究者とは誰を指すのか」、「研究成果はどのようにして生み出されるべきものか」、方法に関する根源的な問いを投げかけるものだ」と述べる。

2000年代初めより、子ども期を対象とする研究は、子どものため (research for children) だけでなく、子どもによって (by children)、あるいは子どもとともに (with children) 行うべきだという主張が高まった。それに対しハマーズリーは、「当事者である子どもを調査に参加させることこそが、子どもの生活に対する真の理解を産むという認識」と「子どもは、生活のなかで何が問題で、何をなすべきかをすでに知っているというある種の思い込み」が前提となっていないか、と問う。子どもに限らず当事者が、一般に想定



されるような方法で自己の置かれている状況を把握しているのかは疑問であり、当事者の経験や意見を信頼し、利用価値を広げる方法が採られようとすることに對し熟慮を促すのである。

現在、子どもの経験や意見を取り入れる方法は、インタビュー調査、インタビュー調査と参加観察を組み合わせたエスノグラフィーが一般的である。従来の子ども対象のインタビュー調査に対しては、大人が主導し、大人が設計し、大人の視点から質問項目や文言が考案されているため、大人の想定内に留まる回答しか子どもから引き出せていないとの反省が生まれた。ここから、大人の思惑や操作が及ばない回答を得ようと、「子どもの声」を直接反映した方法の検討が始められるのである。

その真摯な試みに對し、ハマーズリーは敢えて「声」の概念の再考を迫る。例えば、インタビュー調査で「子どもの声」を聴くときの「声」とは何を指すのか。近年、社会的弱者の支援や人権擁護の立場から、また市民の行政参加を促す運動や、消費者の需要拡大をねらうビジネスの現場から「声」を聴くことがますます重視されるようになっていく。そういった福祉増進や倫理意識・規範の強化、民主主義の推進、市場原理の拡張といった観点から尊重されようとする「声」と、子ども期研究が聴き取ろうとする「子どもの声」を同列におけるか否か、とハマーズリーは問いを迫る。

さらに、「声」を重視する近年の動向には、「声」の起源は各人の内面にあり、その人自身の純粋な何かを表している、という認識が根底にある、とハマーズリーはみる。だが、果たして「子どもの声」は「大人の声」に比して異なるのか。ハマーズリーは、子どもか大人かに限らず、機会が与えられた場合の発言は、ある意味、他の人が言ったことやしたことに対する反応であり、明確に特定された問いに對してであろうと一般的で漠然とした問いに對してであろうと、どちらも常に聞き手を意識してなされるものではないか、と指摘する。そして、そもそも子どもの発言が文化的環境において利用可能な種々の「声」により構成されていることは、心理学の実験等ですでに証明済みと反論するのである。

ハマーズリーの見解は次のように明快である。人々の発言は、社会文化的に汚染されていない、内面的なものからもたらされることはない。また、子どもの声が単に子ども独自の認識や感情を表したり、子どもの最善の利益を代表したり、あるいは子どもの好みや媒介されずに表現しているとも考えることもできない。声の「真正性 (genuineness)」を、外界に影響されない個人の内面から発せられたものでなければならないと考えると、かえって誤解を招くことにならないか。ハマーズリーは、子どもや他の誰の発言も「真正」ではない、ということを知りたいのではない。重要なのは、「声」は内面を表すという結論に達するには評価が必要であり、それは何が自律的な判断とみなされ、何が歪曲とみなされるかについての仮定に依存しているということである。このように、ハマーズリーは、「声」の概念は非常に複雑であり、何が「真正の声」に相当するかを判断する

のは容易ではない、と留保を促す。だからこそ、子ども参加型調査の意義と方法については、いっそうの議論が待たれることになる。

最後にハマーズリーは、子ども自身が研究をコントロールすべきであるという主張が、研究プロジェクトは子どもの状況に変化をもたらすように設計されなければならない、という考えと結びついていることが非常に多い点についても注意を促す。例えば、学校研究に児童生徒を参加させることは、児童生徒が当事者意識をもって重要課題に取り組み、集団的利益に貢献すること、あるいは疎外された視点や存在を学校の主役にすることへの期待が隠されていないか。このことは、研究の目的や研究者の役割を幅広いものにし、特定の政治的志向の中に位置づけてしまいかねない。その任務について研究協力者である児童生徒が納得する形で同意を得ているか、倫理面で様々な配慮も要してくる。

以上、ハマーズリーは、政策的介入を要する社会問題に対して、「エビデンス」の提供による積極的関与や効果的实践への貢献を求める研究環境の変化を前に、子ども期研究者が「知の生産」のみに専念しづらい状況を紐解く。同記事案の解明にあたり、研究者の専門や立場が変われば結論が異なるだけでなく、研究者の予想を超え、データが第三者に都合よく利用されることも出てくる。だからこそ、特定の事案が改善や解決を要する緊急の社会問題へと編成される過程とその背景にある問題意識や価値観を研究者自身が確認し、自分の研究成果が及ぼす社会への影響を想像しておく必要がある。特に当事者である「子どもの声」を採取し、その「声」を直接反映させる方向で変革を進めようとする機運が盛り上がるなか、「声」の概念そのものを問い、敢えて歯止めをかけようとするハマーズリーの姿勢は異色ともいえる。このようにハマーズリーは、「研究とは何のため、誰のためにあるのか」、「研究を誰が担い、どう行うのか」を論じながら、子ども期研究における方法論を展望しようとするのである。

#### 4. おわりに

本稿では、子ども期研究の方法を検討するにあたり、英国オープン大学の子ども期研究の教科書からM.ハマーズリーの方法論の概要を翻訳紹介し、研究法としてどのような選択肢があるか、それぞれの方法の強みと弱み、さらには子ども期を研究対象とするゆえに生じる固有の課題について論点整理を行ってきた。

ハマーズリーは、データとは、研究主体による意思決定を伴う「知の生産過程」の産物である以上、研究の各段階で何を根拠に意思決定がなされたかがデータの妥当性や信頼性を左右するため、方法やデータの種類に関係なく、「知の生産過程」の精査こそが重要と説く。さらに、課題設定や結果分析において、研究者の志向性や価値観が強く反映されていないか点検を促す。このことは、研究の目的が「記述」か「評価」か、「知の提供」か「問題解決のための処方箋の提案」か、研究者自身の立ち位置や意識とも密接に関わる。ゆえに、研究目的と方法の選択は表裏一体で、結論の方向性までも決定づけて

しまう。目的に応じて方法は異なるからこそ、方法の選択において目的は何か、何が真に問われるべき課題となるため、どの方法がふさわしいかの判断は研究目的次第となる。

ハマーズリーは、問題の構築性すなわち子どもに関する事案は不変かつ普遍に存在し続けているわけではなく、その位置づけや意味は特定の時空や人間関係、文脈のなかで編成され変化しながら、あるものは社会問題として認知され、科学的解明と政治的介入を要すると判断されていく、そこに研究者は無縁でないと警告する。あるイデオロギーを正当化し、ある政策を有利に進める根拠として研究成果が巧みに加工され、第三者に都合よく利用される例も少なくない。だからこそ、研究者の「善意」や「理想の子ども観」に根ざした社会改革志向には一定の自制が求められ、特定分野の既定の方法によって得た研究成果を実践へ即応用させようとするなど、予め想定した結論や方向にたどり着くように設計された研究計画の在り方に再考を迫るものとなっている。

子どもの生の現実に向ける方法として、子ども参加型研究が推進されつつあるが、その可能性は未知数である。子ども期研究特有の難しさには、子どもの他者性や異質性をどう捉え、いかに扱うか、大人のフィルターを介さず子どもは理解可能か、がある。実体としての子どもだけではなく、概念としての子ども = 子ども期をも対象とする子ども期研究の学術的意義とは、我々の子どもに対する概念装置の俯瞰と相対化にある。概念装置は研究者が採る方法にも作動する。子ども期研究において方法の絶えざる検証が求められるのはそのゆえんである。

## 注

- 1 Marek Tesar 【Childhood Studies, An Overview of】 M.A.Peters ed., (2016) *Encyclopedia of Educational Philosophy and Theory*, Springer DOI10.1007/978-981-287-532-7\_261-1p.1
- 2 Daniel Thomas Cook 【Introduction The Perspective and Interdisciplinarity of Children and Childhood Studies】Daniel Thomas Cook ed.,(2020) *SAGE Encyclopedia of Children and Childhood Studies* SAGE Publications p.xxxv
- 3 Allison James & Alan Prout, (1990→1997→2015) *Constructing and Reconstructing Childhood: Contemporary Issues in the Sociological Study of Childhood, 3rd edn*, Routledge Alan Prout, (2005), *The Future of Childhood: Toward the interdisciplinary study of children*, Routledge
- 4 Nicolas Rose (1989→1999→2006) *Governing the Soul : The Shaping of the Private Self* Routledge  
堀内進之介・神代健彦監訳 (2016) 『魂を統治する私的な自己の形成』 以文社, Erica Burman (1994→2007→2016) *Deconstructing Developmental Psychology* Routledge (青野篤子・村本邦子監訳 (2012) 『発達心理学の脱構築』 ミネルヴァ書房), Valerie Walkerdine (1998) “Developmental psychology and the child-centered pedagogy: the insertion of Piaget into early education”, Julian Henriques eds. *Changing the subject*, Routledge pp.153-202, Sheldon H. White (2003) “Developmental Psychology in a World of Designed Institutions”, Willem Koops & Michael Zuckerman eds. *Beyond the Century of the Child: Cultural History and Developmental Psychology*,

- University of Pennsylvania Press pp.204-223, André Turmel (2008) *A Historical Sociology of Childhood: Developmental Thinking, Categorization and Graphic Visualization*, Cambridge University Press, Wendy Stainton Rogers (2015) "Promoting better childhoods ; construction of child concern", Mary Jane Kehily ed. *An introduction to childhood studies*, Open University Press, pp.101~119,
- 5 Martin Woodhead (1990→2015) "Psychology and the cultural construction of children's needs", Allison James and Alan Prout eds. *Constructing and Reconstructing Childhood: Contemporary Issues in the Sociological Study of Childhood* pp.54-73, Martin Woodhead (2009) "Child Development and the Development of Childhood", J. Qvortrup, W.Corsaro, & M.S. Honig eds., *The Pargrave Handbook of Childhood Studies* Palgrave., pp.46~61, Martin Woodhead (2013) "Childhood: a developmental approach" Mary Jane Kehily ed. ,(2013) *Understanding Childhood: A Cross-Disciplinary Approach, Second Edition (Open University Childhood Series)*, the Policy Press pp.99~159, Martin Woodhead (2015) "Childhood studies: past, present and future", Mary Jane Kehily ed. (2015) pp.19~33,
  - 6 Lange, A., & Mierendorff, J. (2009) "Method and Methodology in Childhood Research", J. Qvortrup, W.Corsaro, & M.S. Honig eds., *The Pargrave Handbook of Childhood Studies* Palgrave., pp.78~96 G.B. Melton. A. Ben-Arieh, J. Cashmore, G.S. Goodman, & N.K. Worley eds., (2014) *The SAGE Handbook of Child Research*, SAGE, Gheaus, A., Calder, G., & DeWispelaere, J. eds. (2019). *The Routledge Handbook of the Philosophy of Childhood and Children*. Routledge
  - 7 【Contributors】 Mary Jane Kehily ed., (2013) *Understanding Childhood: A Cross-Disciplinary Approach, Second Edition (Open University Childhood Series)*, the Policy Press, p. vii
  - 8 Martyn Hammersley ~ Social Science, Philosophy, etc About-me  
<https://martynhammersley.wordpress.com/about-me/> (2023年9月17日閲覧)  
Martyn Hammersley, Professor Research, teaching at The Open University  
<https://www.bera.ac.uk/person/martyn-hammersley> (2023年9月17日閲覧)
  - 9 Martin Hammersley, Chapter 6 How is the Knowledge about childhood produced? The issue of methodology, Mary Jane Kehily ed., (2013) pp.267~305
  - 10 Mary Jane Kehily ed., (2013) では、以下のような文書データ (documents) を用いた子ども期研究の成果が示され、人文・社会科学のアプローチの可能性を知ることができる。子産み・子育てに関する風俗習慣、行事およびそれらに関する歴史資料／子ども期の思い出や記憶に関する叙述／家庭生活や親子関係、家族が描写された伝記、日記、手紙／子どもの病気に関する医学書や治療記録／道徳規範／宗教書／哲学書・思想書／政策制度／法律／国際条約／検視や裁判の記録／政府の委員会の公開報告書／妊娠・育児雑誌／少年・少女向け雑誌 (漫画やファッション誌など)／新聞の投書欄／子ども・子ども期を描写した詩、小説などの文学作品／壁画、彩色写本、絵画、写真／児童心理学の教科書／空間・建築デザイン など
  - 11 Derek Freeman (1999) *The Fateful Hoaxing Of Margaret Mead: A Historical Analysis Of Her Samoan Research*, Westview Press
  - 12 Owain Jones (2001) "Before the dark of reason: some ethical and epistemological consideration on otherness of children" *Ethics, Place and Environment*, Vol.4 No.2 p. 177
  - 13 Martin Hammersley, Chapter 6 Research on childhood issues as social problems, Heather

Montgomery ed.,(2013) *Local childhoods, global issues: Second Edition (Open University Childhood Series)* The Policy Press,pp.256~284

- 14 Ana Terrsa Ortiz and Laura Briggs, (2003) "The culture of poverty, crack babies, and welfare cheats: the making of "healthy white baby crisis" *Social Text* 76 Vol.21,No.3 pp.39-57
- 15 Deborah A. Frank, MD, Marilyn Augustyn, MD, Wanda Grant Knight, PhD, Tripler Pell, MSc, and Barry Zuckerman, MD, (2001) " Growth, Development, and Behavior in Early Childhood Following Prenatal Cocaine Exposure : A Systematic Review", *Journal of the American Medical association* Vol.285,Np.12 pp.1613-1625

すとう みかこ (子ども期の歴史と思想研究、子ども文化論、子ども社会学)

